2019. September Vol.49

C&C

Care Communication

ケア&コミュニケーション

DENTAL REPORT

全身管理下での歯科治療が
必要な患者も受け入れながら
地域の1.5次医療機関としての
役目を果たす

征矢歯科医院 副院長
征矢 学 先生

征矢歯科医院 院長
征矢 亘 先生

P01-06

INSIDE REPORT

北の大地から、
理想の成功を追求し、
国際標準を見据えた
歯科医療を提供する

いのうえ歯科医院 理事長
井上 裕之 先生

P07-12

THE FRONT LINE

マイクロスコープを常用し
レーザーでの
根管治療も
重視する都市型医院

文京瀧田歯科医院 院長
瀧田 稔弥 先生

P13-16

DOCTOR'S TALK

1人30分の
診療ルールを厳守し、
多忙なビジネスパーソンから
厚い信頼を得る

徳永歯科医院 院長
徳永 哲也 先生

P17-19

SASAKI
http://www.sasaki-kk.co.jp

征矢歯科医院

「全身麻酔器」を備えた診療室

全身麻酔を必要とする治療では、麻酔管理を学副院長が担当し、
口腔内の治療は亘院長が担当している

全身管理下での歯科治療が必要な患者も受け入れながら地域の1.5次医療機関としての役目を果たす

茨城県日立市の「征矢歯科医院」は長年、予防歯科に力を入れてきた。3年前から無痛治療を導入し、1.5次医療機関としての役割も担っている。予防と全身管理型の歯科医院として、その歩みと今後について伺ってみた。

征矢歯科医院 副院長 征矢 学 先生
院長 征矢 亘 先生

征矢 学 副院長　征矢 亘 院長

父や恩師、先輩たちから受け継いだ地域医療への思い

「征矢歯科医院」が開業したのは1985年。インタビューをお願いした征矢学副院長の父、征矢亘院長が「地域に寄り添う歯科医院を」との思いを胸に開院した。

亘院長が重視したのは、歯周病治療と予防だ。当時は、虫歯を削って詰める、かぶせるの治療が主流の時代。しかし、亘院長は「口の健康を長期的に維持する」ことにこだわり、患者の口腔衛生に対する意識を変えていった。

そんな父の姿を見て育った学副院長が歯科医師を目指したのは、自然な流れだった。大学時代に目指していたのは、矯正歯科医だ。子どもの頃に受けた矯正治療で苦労した思い出があったからだ。

ところが、研修医時代、勤務先の歯科医院で出会った歯科麻酔科医が、学副院長の将来を変えることになった。大学病院以外でも歯科麻酔科医が活躍する場があること、一般の臨床現場で全身管理が必要とされる時代になっていることに気づかされたのだ。

東京歯科大学大学院で歯科麻酔学講座を専攻した学副院長は、師事した一戸達也教授の言葉にも感銘を受けることになった。

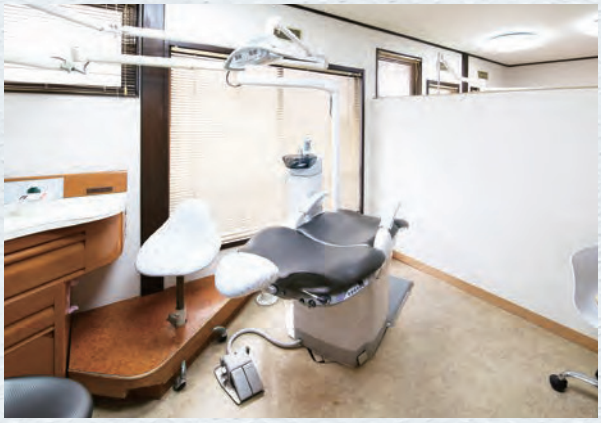
「麻酔では患者さんを治すことはできない。歯科治療の技術も身につけ、必要とされる歯科麻酔科医になりなさいと一戸教授から教えていただいたのです」

その言葉を励みに歯科麻酔と治療技術の研鑽に努めた学副院長は、大学院修了後、週1～2回の征矢歯科医院の勤務と並行し、フリーランスの歯科麻酔科医として全国から麻酔業務を依頼されることになった。そこで見たのは、大学病院クラスの設備が整っていない地域では、歯科麻酔科医による全身管理下での治療を受けることが難しく、患者が遠方まで行かなければならない現実だった。そして、同様の現象は、征矢歯科医院がある日立市でも起きていた。

学副院長は、「時間や費用の制約から通院が難しく、歯科治療を諦めざるを得ない状況をなんとか改善したい」という一心から、亘院長と相談し、征矢歯科医院の診療内容に無痛治療を加えた。

そして、3年前から静脈内鎮静法による無痛治療を開始。昨年からは、日帰りで可能な全身麻酔も導入した。これまで約150名の患者が、全身管理下での歯科治療を

ユニットのそばに「生体情報モニタ」を設置した状態。院内には「AED」も完備している


チェアはパーテーションで区切っている

P01のチェアを一般診療用に使う場合のセッティング

受けたという。

全身管理を必要とする患者が潜在的に数多く存在

征矢歯科医院では、どのような患者が無痛治療を受けているのだろう。

行われている無痛治療のうち、「静脈内鎮静法」は、点滴により鎮静薬を静脈に投与して麻酔を行う方法だ。静脈内鎮静には痛み止めの効果はないため、口腔内への局所麻酔は必須となる。

適応になるのは、軽度の歯科恐怖症や異常絞扼反射（嘔吐反射）を持つ患者、全身的既往を持ち、通常の歯科治療ではリスクのある患者、障害を持つ患者になる。

もう1つの「日帰り全身麻酔」の場合は、完全に意識のない状態で治療できるため、1回で多くの治療が可能になり、通院回数が少なくなるメリットがある。征矢歯科医院では、適応の基準を大学病院等よりも厳しく設定し、全身的既往のない重度の異常絞扼反射の患者、静脈内鎮静法では管理が不可能な障害のある患者を対象にしている。

無痛治療を始めた当初、学副院長は高齢者の適応が多いのではないかと考えていたが、予想以上に歯科恐怖症の患者が相談に訪れることに驚いた。

「異常絞扼反射を持つ患者さんのなかには、通院を諦め、25年も治療を受けていない方がいました。また、恐怖心が強く、待合室で号泣してしまい、診療室に入室でき

歯科医院は横長の平屋建て

ない成人の方もいます。通常の歯科治療を受けることが難しい患者さんは、世界中どの地域にも存在し、日本では400～500万人いる計算になります。通院ができないため、歯科医師は気づきにくいのですが、それほど多くの困っている患者さんが存在していることは知っておいたほうがいいと思うのです」

無痛麻酔を必要とする患者は、長期に渡り、歯科治療を受けていないことが多い。そのため、虫歯や歯周病が重症化し、一般歯科の治療として難しいケースも珍しくない。

しかし、征矢歯科医院には、治療経験が豊富なベテラン歯科医師の亘院長がいる。難しい症例では、亘院長と学副院長が十分に検討した上で、治療に当たる。とくに安全管理が厳しい全身麻酔の場合は、麻酔管理を学副院長が、口腔内の治療や手術は亘院長が担当しているという。「役割を分担することで、お互いを尊重し合い、安全で快適な歯科治療が目指せていると思います」と学副院長は話す。

他の歯科麻酔医や歯科医院との連携も深める

今、学副院長が課題としているのは、地域の歯科医院や総合病院との連携をどう深めていくか、ということだ。

現在、茨城県内に歯科麻酔専門医・認定医は数名しかいない。そのため、学副院長は北茨城市民病院で全身麻酔を、茨城県歯科医師会が開設した「口腔

待合室には自然光がやわらかく注ぐ

広々とゆったりした受付

応接室のような雰囲気の待合室

センター土浦」で障害者歯科治療を担当している。

「大学病院などが近隣にない地域の無痛治療に対する必要性は、未知数です。しかし、潜在的に困っていらっしゃる患者さんがいることは事実です。患者さんが涙ながらに訴える姿を目の当たりにすると、『本当に苦労されてきたのだな』と痛感します」

学副院長は、そうした患者に対し、複数回のコンサルテーションを行い、治療風景の写真やイラストを用いて治療の流れ、メリットとデメリットを十分に説明し、理解してもらった上で同意書を作成している。

こうした経験から、全身管理型歯科医院の重要性を、茨城県内はもちろん、全国的に広め、スタンダードな形にしていく必要性があると語る。

そして、その一環として力を入れているのが、歯科麻酔科医の臨床的なスタディグループ「CDAC(シーダック)」の運営だ。

歯科麻酔科医は大学の医局を離れると、個人での活動になり、専門医や認定医をどう活用していくべきか、悩むことも多かった。

そこで、出身大学に関わらないネットワークを構築し、組織を離れたあとの麻酔歯科医のプラットホームとして創設された。学副院長は理事を務め、現在は全国から35名が参加している。

「CDAC」は、歯科麻酔科医の研鑽の場だけでなく、一般歯科医師向けの実践的歯科麻酔学の講演を行ったり、一般開業医と歯科麻酔科医との医療連携のプラットホームとして機能しつつある。

「患者さんが悩みを直接、相談できて、地域の歯科麻酔科医とコンタクトができるようなプラットホーム作りも進めているところです」

全身管理型の歯科医院が標準になる時代を目指す

征矢歯科医院では理念の一つに「すべての方に治療を受けていただく」ことを掲げている。亘院長が長年、地域住民の歯を守ってきたが、学副院長が加わったことで、受け入れられる患者の幅が広がることになった。

ユニットのそばに「生体情報モニタ」を設置したことも、その変化の1つだ。学副院長は「これからの歯科医院には必須の機器」と語る。

高齢者や循環器系疾患を有する患者では生体情報モニタを用いて血圧の変動を考慮した治療を進める。また、緊張が強い患者は血管迷走神経反射を引き起こす可能性があるために、あらかじめ生体情報モニタを装着し、緊急時にはすぐに対応が取れる体制を整えている。

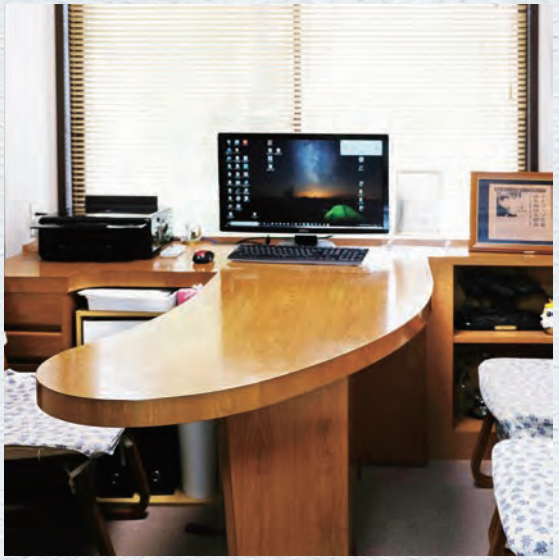
それだけでなく、征矢歯科医院では、歯科衛生士を始め、ほとんどのスタッフが「BLS(一次救命処置)」の資格を持ち、「生体情報モニタ」の正しい装着方法を含め、日頃から緊急時に対するトレーニングを積んでいる。さらに、「ACLS(二次救命処置)」の資格を持つ学副院長がいることで、より高度な救命処置にも対応できる体制が整っている。

その結果、大学病院や総合病院の高次医療機関と一般の歯科医院との間をつなぐ、1.5次医療機関としての役割も担うようになってきているのだ。

そして、その役割をより高いレベルで果たすため、征矢歯科医院は来年にも隣地に移転新築する計画もある。「新しい施設では、院長が大切にしてきた予防管理型に加え、全身管理型も合わせ持つハイブリッドな歯科医院にすることを考えています」

具体的には、診療室に全身麻酔による治療がしやすいスペースを確保し、ユニットもプライバシーが確保できる個室を設けること、リカバリー室の新設などを計画している。

ソフト面では、医科も含め各専門医との医療連携やマンパワーの確保、歯科衛生士の歯科麻酔学会認定の資格取得、地域内での講演活動の充実化などが目標だ。



落ち着きのあるカウンセリングスペース

「全身管理型歯科医院は、これからますます必要とされる存在になります。征矢歯科医院を充実させるとともに、全国で活躍されている歯科麻酔の先生方やこれから歯科麻酔の世界を目指したい後輩を結びつけていきたい。全身管理型歯科医院がスタンダードになることで、歯科受診が困難な患者さんを1人でも少なくしたいと思っています」

征矢亘院長(前列左)と学副院長(前列右)、スタッフのみなさん

PROFILE

征矢 学 先生

●2009年　日本大学松戸歯学部卒業　●2010年　日本大学松戸歯学部付属病院臨床研修医。東京歯科大学大学院歯学研究科歯科麻酔学専攻　●2014年　歯学博士取得。東京大学医学部附属病院　麻酔科・痛みセンター特任臨床医　●2015年　東京歯科大学歯科麻酔学講座 助教　●2017年　東京歯科大学歯科麻酔学講座非常勤講師　●北茨城市民病院歯科口腔外科　歯科麻酔非常勤医師　●茨城県歯科医師会「口腔センター土浦」非常勤歯科医師　●CDAC理事　●日本歯科麻酔学会　歯科麻酔専門医・認定医　●日本障害者歯科学会認定医

征矢歯科医院　住所:茨城県日立市弁天町2-11-8　TEL:0294-24-0648　HP:http://soyadent.com/

いのうえ歯科医院

すっきりとした受付と待合室

開放的な広さのある通路

広々とした敷地に歯科医院は建つ

北の大地から、理想の成功を追求し、国際標準を見据えた歯科医療を提供する

北海道帯広市にある「いのうえ歯科医院」は、「国際標準の歯科医療を」をコンセプトにしている。多数の書籍も執筆する井上裕之理事長に歯科医療に込める思いを伺ってみた。

いのうえ歯科医院 理事長 井上 裕之 先生

地域にとらわれず、世界を見据えた歯科医院を開業

「いのうえ歯科医院」は、とかち帯広空港から車で35分ほどの距離にある。井上裕之理事長が東京歯科大学大学院を修了し、千葉市での勤務医を経て、故郷の帯広市に開業したのは、1994年のことだ。

帯広での開業を踏まえ、井上理事長が理想像として描いていたのは、国際標準の歯科治療ができる歯科医院だった。

そのために、勤務医時代の井上理事長は寸暇を惜しんでセミナーに参加した。幸いだったのは、勤務先の歯科医院で、院長からの理解を得て、習得した知識や技術を実践する機会にも恵まれたことだ。

そして、もう一つ、開業後にアメリカのアトランタ研修で得た経験も大きな自信になった。

アトランタにはドクター・ゴールドスタインやドクター・ガーバーなど、アメリカを代表する各分野のスペシャリストが広大な敷地で連携しながら歯科治療をする「チーム・アトランタ」がある。

井上理事長は、「チーム・アトランタ」の診療を目の当たりにし、高い理想と柔軟な思考を持ち、明確な目標に向かって行動すれば、地域にとらわれることなく、質の高い歯科診療ができると気づかされたのだ。それだけでなく、治療から予防まで、完結する歯科医院が地域にあることは、帯広の歯科環境の向上にも貢献できる。

「開業前から、たとえ自分が治療できない分野の症例でも、世界レベルの先生方とのネットワークがあれば、コンセンサスを満たす歯科治療ができると思っていました。その理想像をアトランタで見ることになり、帯広で自分が取り組んでいることへの自信が深まったのです」

井上理事長の目標と視野は、この当時からつねにクリアだった。

スタート時の規模は、チェア4台、インプラントのオペのために、井上理事長は欧米の最先端の歯科医院内などを見学し、広さと設備は十分に確保しながら、一般診療にも使える兼用タイプの診療室を設けた。

そして25年経ち、現在は、チェアが7台に増えたが、全体的な規模は、開業時から大きくは変わっていない。その理由を井上理事長はこう語る。

「目標設定が明確であれば、仕事にかける時間を最小限に抑えながら、最大限の成果が得られるバランスが見えてきます。診療スタッフが確保できない場合も想定し、自分1人でも対処可能な設備と体制を整えたことが、開業以来、歯科医院の姿が大きく変わらなかった理由です」

建物中央に広い通路がある設計でそれぞれの診療室へ入れる

成功哲学を支える徹底したPDCAサイクル

現状を分析し、明確な目標を掲げ、その目標を達成するためにどう計画を立てるか、そして目標が達成できた場合、あるいはできなかった場合に何が原因だったのかを分析し、次の計画の改善に役立てていく。井上理事長は、この「PDCAサイクル」を重視している。たとえば、患者数の目標は1日40人からスタートし、達成すると次は80人、100人と増やしていった。

「自費診療についても1人あたりの金額の目標を立て、最良の治療を求める人と契約しようという目標を立てました。開業して3年目には、それが達成できました。そこからは、院内の価格帯は取り払おうと考えていったのです」

なぜ井上理事長はPDCAサイクルを活用し、歯科医院を成功に導くことができているのだろうか。学生時代から目標に向かって努力を重ねてきた井上理事長だが、「成功」に対する意識がよりいっそう明確になったのは、10数年前、家族が交通事故に遭ったことがきっかけだった。

「それまでニューヨーク大学で初の日本人として研修を受けるなど、年間100日はセミナーを受ける日々でした。ところが、事故をきっかけに、セミナーどころではなくなってしまいました。この逆境から抜け出すにはどうしたらいいかと考えたとき、1冊の本と出会ったのです」

その本とは成功哲学の提唱者、ナポレオン・ヒルの著書『思考は現実化する』だった。井上理事長は、成功とは何かを見つめ直すことになった。

「本当に幸せな人とはどういう人間なのだろうと考え

隣のチェアとはパーテーションで仕切っている

マイクロスコープを備えたチェア

機能的に配置されたチェアまわり。オペ室としても使用している

たとき、仕事だけでなく、周囲との人間関係と健康も含めて、バランスが取れていることだと気づいたのです」

そこから、自身を変える取り組みが始まった。意識改革に役立つ教材の本を読み、研修のテープを聴く毎日を続けた。

「歯科の勉強もそうでしたが、何事も徹底的に取り組むタイプなので、睡眠中や移動中も音声を流すなどして、自分に叩き込みました」

そして、この自己改革は、歯科治療にも影響を与えることになった。以前であれば、うまくいかなかった部分に注視する面があったが、意識改革をしてからは、自分を俯瞰して見ることができるようになったという。

「観客席から見るように自分がどう患者さんと接しているか、正しい仕事ができているかの視点から判断できるようになっていったのです」

マネジメント分野にも活動の幅を広げる

現在、井上理事長は、東泰輔副院長との二人三脚で歯科医院の治療にあたっている。歯科医師としてだけでなく、1人の社会人として活動する時間も重要と考えているからだ。

その1つは書籍の執筆だ。意識改革の体験について講演したことを機に、出版社から書籍の企画が持ち込まれ、これまでに80冊以上の本を執筆している。

また、2006年に経営学博士を取得したことで歯科だけでなく、マネジメントなどの講演やセミナー講師を依頼されることも多い。

そうした歯科以外の活動もあることから、井上理事長にとって東副院長は、大切な右腕的存在だ。

メンテナンスのチェアは色を変えモダンな雰囲気に

井上理事長の日々は分刻みで動く。いのうえ歯科医院で治療に集中するのは月曜日の夕方から木曜日の夕方まで。すぐに飛行機で飛び、金曜日から日曜日までは、東京で講演などをこなす。ときには海外にも飛ぶ。その間をぬって、健康維持のために、ジムで体を鍛えることも怠らない。

「日々の診療は東副院長が主体になり、私は遠方から来院される短期間で治療を終わらせる必要がある患者さんを担当しています。インプラントやスーパーデンチャー、レーザーによる歯周病治療が多いですね」

理念に基づき、2つのISOでブランディングを極める

これほど忙しい井上理事長だが、いのうえ歯科医院のオペレーションは東副院長を中心に揺らぐことなく、運営されている。そのシステムを支えているのは、まずスタッフ全員と決めた理念だ。

「理念はスタッフが重要性を感じやすい言葉で表現することが大切です。スタッフには、問題に対する改善を考えるときや報告書を書くときなども、理念に基づいているかどうかをつねに意識するように指導しています」

そして、理念に基づき、実際の行動を起こすときの基本になっているのが、品質マネジメントシステムの「ISO9001」と環境マネジメントシステムの「ISO4001」だ。この2つを取得した歯科医院は珍しい。

いのうえ歯科医院では、これらのシステムを活用し、毎週、「週間PDCA」のレポートをまとめている。このレポートを井上理事長と東副院長、コンサルタントがチェックし、スタッフにフィードバックしている。その連絡に使っているのは、Facebookのグループ機能だ。全体ミーティングは朝礼だけで、他に行うことはない。

「治療、歯科衛生士たちによるメンテナンス、受付、管理の4つの部門が、私や他の部門に依存することなく、それぞれ自分たちの部門のブランディングを考えてもらいたい。そして、各部門が自立的に動き、現れた結果がいのうえ歯科医院全体を形作るものになっていくと考えているのです」

美しく整えられた消毒・滅菌スペース

整理の行き届いた技工スペース

CTを完備したレントゲン室

井上理事長の話を聞いていると、時間や行動に無駄がない。徹底した分析と改善を繰り返し、ブラッシュアップしているからこそ、歯科医院のオペレーションも研ぎ澄まされていくのだろう。

最後に井上理事長は、患者接遇に対するユニークな取り組みも教えてくれた。メンタルセラピストの知識と経験を生かして自ら開発したプログラムソフトだ。いのうえ歯科医院では、この心理学アプローチで得られた患者の特性をカルテに記載し、患者への声かけや傾聴の仕方などを工夫しているそうだ。

さらに、井上理事長は3年ほど前から、ISO9001を歯科用に使いやすい形に変えることはできないか、検討もしているという。

井上理事長の興味は、どこまで広がっていくのだろう。アイデアと行動の先には限界がないようだ。

「現実から考えると諦めることが多くなる。そうではなく、見方を変えれば現実も変わっていく。自分の理想を追求していくことが成功につながるのです」

井上理事長（前列左）と東副院長（前列右）、スタッフのみなさん

PROFILE

井上 裕之 先生

●1992年　東京歯科大学大学院・歯科補綴学専攻修了　●1994年　いのうえ歯科医院開業　●2002年　東京歯科大学歯科補綴科第二講座非常勤講師　●2003年　北海道医療大学歯科補綴科第二講座非常勤講師　●2006年　経営学博士取得　●2008年　島根大学医学部臨床教授　●ブカレスト大学医学部客員講師　●2011年　インディアナ大学歯学部客員講師　●2017年　東京医科歯科大学非常勤講師　●ニューヨーク大学歯学部インプラントプログラム アシスタントディレクター　●世界初マーフィートラストグランドマスター　●書籍累計発行部数130万部を突破

医療法人社団
いのうえ歯科医院

住所：北海道帯広市西9条南2丁目12-2　TEL：0155-25-6480　HP：https://www.inoue-dental.jp/

文京瀧田歯科医院

やわらかい雰囲気の待合室と受付

パーテーションで仕切った診療スペース

マイクロスコープを全チェアに設置

マイクロスコープを常用し レーザーでの根管治療も 重視する都市型医院

「文京瀧田歯科医院」は、東京の歯科大学が密集する本郷にある。
患者全員の診療にマイクロスコープを使い、
歯内療法にはレーザーも駆使する理由を伺ってみた。

文京瀧田歯科医院 院長　瀧田 稔弥 先生

離島での治療経験を機に 開業への意識が高まる

「文京瀧田歯科医院」は、本郷三丁目駅と御茶ノ水の駅にも近い交差点のビル2階にある。シンプルな白と木目調の院内には自然光がたっぷりと差し込み、さわやかで落ち着いた雰囲気が漂う。

チェアは4台。うち1台は個室にあり、他はパーテーションで区切られている。そのチェアのすべてにマイクロスコープが備えられ、治療だけでなく、メンテナンスの患者にも使われている。

文京瀧田歯科医院が開業したのは、2014年。歯内療法が専門の瀧田院長が、自身の歯科医院を持つ方向へ気持ちが変わっていったのは、2006年、大学院修了後、大学病院に在籍しながら、半年間、「東京都神津島村歯科診療室」へ赴任したことがきっかけだった。

「離島の神津島では、歯科治療全般を担当しなければなりません。最初は不安ばかりでした。でも、島民の方たちと親しくなり、生活背景も踏まえながら治療を続けるうちに、根管治療を一般治療に取り入れながら、口腔全体の健康を重視したいという気持ちが強くなっていったのです」

瀧田院長は大学病院に戻り、神津島も含め、2年間勤務。その後は、東京と埼玉にある歯科医院、父が院長の千葉県銚子市にある歯科医院での経験も積んだ。副院長を任された埼玉の歯科医院では売上が倍増。その歯科医院では、居抜き譲渡との話もあったが、瀧田院長は現在地での開業を決意した。

「50件以上のテナントを見学し、ここに決めたのは、大学時代からなじみ深い場所だったこと、周囲に歯科大学が多く、最新の情報が入ってくるため、学び続けるのには最適の場所と考えたからです」

本郷近辺は、古くからの住民と新築マンションに入居する住民が混在する地域だ。健康意識も高い。質の高い歯科治療を必要とする患者が多いことは、瀧田院長が目指す診療方針に合致していた。

「患者さんの多くは会社員の方。6割が女性です。紹介でいらっしゃる患者さんが多いですね」

患者全員の治療と予防に マイクロスコープを使用

文京瀧田歯科医院では開業初日から、患者全員にマイクロスコープを使っている。顕微鏡下の治療は時間がかかると言われているが、瀧田院長は「使わなかったときの治療とそう変わらない」と話す。実際、予約の目安である1人30分の診療時間で済んでいる。

瀧田院長がマイクロスコープに出合ったのは2002年、大学院で歯科療法科に入局したばかりの頃だ。当時の歯科業界ではマイクロスコープへの関心がまだ低く、ノウハウも暗中模索だったが、初めて顕微鏡の世界を知った瀧田院長には、驚きの連続だった。

半透明なガラスで仕切られた明るい診療スペース

チェアのすべてにマイクロスコープが備えられている

「なんとしても使いこなしたい」という一心で、1日2時間以上の使用を自分に課した。それでも、自分の体のように使えるようになるまでには、2年の歳月が必要だったという。

その後、実家の歯科医院を手伝うようになったときも、院長の父に頼み、マイクロスコープを導入した。父の歯科医院は地元密着型で規模も小さい。患者は早く治療が終わることを願っている。大学病院のように1人の治療に60分以上もの時間をかけることはできない。それでも瀧田院長は諦めなかった。限られた時間内で顕微鏡下の治療に取り組むことで、気がついたときには操作スピードが格段に上がっていた。

現在、文京瀧田歯科医院では、瀧田院長と勤務医1人が治療に当たっている。2人体制とはいえ、患者全員を治療するには、体力と集中力が必要になる。院内を大きな窓から自然光が入る設計にしているのも、マイクロスコープの使用が関係している。

「治療の合間、リラックスできるように自然光に触れられる環境が欲しかったのです。自然な明るさの診療室なら患者さんもリラックスしやすいだろうとも考えました」

日本でこれほど多くの時間をマイクロスコープでの治療に費やしている歯科医師は多くないだろう。瀧田院長も自負を持っているが、それでも「いまだに楽ではない」と話す。マイクロスコープはあくまでもツールの一つ。使いこなした上で、治療技術を向上させることが、患者の健康増進につながっていく。

使い続けることで、院内ではうれしい変化もあった。歯科衛生士たちが興味を持ち、マイクロスコープを歯のクリーニングに使うようになったのだ。

「マイクロスコープの勉強会に自発的に参加してくれたり、根管治療の準備でも先回りして自ら考えて器具を

過不足なく用意してくれたり、優秀なスタッフにはいつも助けられています」

Nd: YAGレーザーの研究などつねに研鑽を重ねる

瀧田院長には次号の「C&C」からマイクロスコープを使ったNd：YAGレーザー治療の症例を紹介していただく予定になっている。

瀧田院長がNd：YAGレーザーと出会ったのは、大学の医局。以来、興味を持っていたが、開業まで使うチャンスがなかった。そんなとき、東京の上北沢と四ッ谷に歯科医院がある行田克則先生に師事した友人の歯科医師に指導を受ける機会を得た。

「それをきっかけにデモ機を借りて試し、コンパクト型のNd：YAGレーザーに決めました。ファイバーが細く、根管治療への操作性が圧倒的によかったからです」

マイクロスコープとレーザーを併用し、根管治療を行った結果は、治療成績がそれまでと大きく違っていたという。

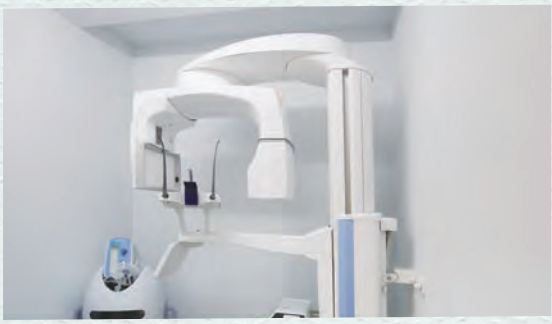
根管は形状が複雑で肉眼ですべてを見ることができないため、治療の難易度が高い。職人的な技量を駆使し、時間をかけて根気よく作業する必要がある。その精度がマイクロスコープとNd：YAGレーザーの組み合わせによって向上することになった。

しかし、マイクロスコープを使って患者全員を治療することは、保険診療では難しい面もあるのではないだろうか。そう問うと瀧田院長は、「今でもジレンマです」と答えた。

現行の保険制度では、歯科医師の技量は評価されない。患者の歯を一生守りたいと考える瀧田院長は、最良の治療と保険制度の狭間で今も格闘中である。

瀧田院長は学生時代から数多くの論文に目を通し、つねに最新治療を身につける研鑽も積んでいる。その知識と経験を踏まえ、患者様にとって最適な治療をいつも模索している。

Nd：YAGレーザー


CTを完備したレントゲン室

「歯とその周辺組織は、生涯で変化し続けていくもの。歯という組織にどう向き合うかは、歯科医師にとって一生続く課題です。あらゆる面を考慮しながら、患者さんに最良の治療を提供していきたいと考えています」

瀧田院長（後列右）とスタッフのみなさん

次号C&C50号にてマイクロスコープとNd：YAGレーザーを使用した症例をご紹介いたします。

PROFILE

瀧田 稔弥 先生

●2001年　日本大学歯学部卒業　●2002年　日本大学歯学部付属歯科病院歯内療法科大学院。歯学博士取得　●2006年　東京都神津村歯科診療室勤務。日本大学歯学部付属歯科病院歯内療法科勤務　●2008～2013年　東京と埼玉の歯科医院に勤務　●2010～2012年　ペンシルバニア大学歯学部歯内療法学講座インターナショナルプログラム受講　●2014年　文京瀧田歯科医院開業　●日本大学歯学部付属歯科病院歯内療法学　非常勤講師　●日本歯科保存学会専門医　●日本臨床歯内療法学会　●日本歯周病学会

文京瀧田歯科医院　住所：東京都文京区本郷3-15-1　美工本郷ビル2階　TEL：03-5615-8424　HP：http://www.bunkyo-takita.com/

待ち時間がないので待合室は小さめ

右利きでも左利きでも治療できるチェア。徳永院長は両利きだ（プランメカ社製）

短時間で制作できるセレックは忙しいビジネスパーソンに好評

1人30分の診療ルールを厳守し、多忙なビジネスパーソンから厚い信頼を得る

新大阪駅の隣駅にある「徳永歯科医院」は、企業も多い街中の歯科医院。
歯科医院の激戦区だが、患者の多くは近隣に勤める会社員だ。
診療時間を厳守し、治療に徹する姿勢が口コミで患者を呼び込んでいる。

徳永歯科医院 院長 徳永 哲也 先生

父の歯科医院を受け継ぎ、誠実な治療を続ける

「徳永歯科医院」は、西中島南方駅から5分ほど歩いたオフィスビルの1階にある。

歯科医師の祖父と父を見て育った徳永哲也院長だが、10代の頃は跡を継ぐ気はなかった。兄が継ぐものと思っていたからだ。

しかし、兄が留学先のアメリカから戻る気持ちがないことを知り、大学3年生のときに大阪歯科大学へ転学。卒業後、1年間、他の歯科医院での経験を経て、父の歯科医院で勤務することになった。1990年のことだ。

「ちょうどこの歯科医院が完成するタイミングで、父と一緒に働くようになりました。1人で診療するようになったのは、15年ほど前からです」

徳永歯科医院は、院長と歯科衛生士2名、チェアは3台の歯科医院だ。しかし、長年に渡る誠実な診療姿勢が、患者から厚い信頼を得て、安定した経営を続けている。

ビジネスマンたちの仕事を考慮し診療時間の管理を徹底

徳永院長が診療方針で重視しているのが、患者1人につき、30分の診療時間を徹底していることだ。

「うちの患者さんの多くは会社員で、7割が男性です。皆さん、時間をやりくりして治療に来てくださっています。仕事に支障をきたさないように、時間を厳守することが、オフィス街の歯科医院ではとても大切なのです」

たとえ、10分ほどで終わる治療でも、30分の診療時間を確保し、他の患者を入れることはしていない。また、治療の説明もカウンセリングの時間を別に取ることはせず、治療の進度に応じて、診療時間内に行っている。

「上司に勧められて来院された患者さんもいます。男性の患者さんは営業職も多いため、どうしても残業などで通院が途切れがちになりやすい。とくに、うちの患者さんは業務から離れられない40～50代が中心です。それらの年代でも、社内で信頼されている歯科医院なら、上司の許可を得て通院することも可能になるのです」

現在、徳永歯科医院の1日の患者は25人ほど。午前中は近隣の住宅街に住む主婦や高齢者の患者が多いが、午後からは会社員の患者が増えてくる。

「こちらが時間を厳守すると、患者さんも予約時間に来院してくれるようになります。信頼関係を築くには、まず時間の管理が重要だと思います」

徳永院長の治療が、男性の患者に好感を持って受け入れられているのには、もう一つ理由がある。質の高い治療を提供する一方で、決断はつねに患者にゆだねていることだ。

徳永歯科医院ではCT、Nd：YAGレーザー1台、セレック、マイクロスコープも備えている。マイクロスコープはなんと20年以上も前に導入した。

マイクロスコープを使用することも

Nd:YAGレーザーもいち早く導入した
(製造販売業者:インサイシブジャパン)

CTを完備したレントゲン室

「マイクロスコープは、老眼になってエンドの治療が難しくなったときのことを考えて、早めに導入しました。父が老眼になってから、治療に苦労していたのを見ていたからです」

現在は、歯科衛生士もPMTCにマイクロスコープを使用している。

「うちの歯科衛生士は20年も勤務してくれているベテランです。私が治療している姿を見て興味を持ったようで、自分から『使ってみたい』と言ってくれました」

また、徳永院長は、部分矯正治療も独学で習得。歯列不正を改善することで、歯周病治療や補綴治療に対する予後が推測しやすくなったという。

アイデアを診療に活かし、患者の主体性も重視

じつは徳永院長はアイデアマンでもある。最新の機器をいち早く取り入れるだけでなく、インターネットを使ったサービスにも取り組んだ経験がある。10年ほど前にはネットを経由しての遠隔診断が可能になるサービスを考案し、ニュース番組のトピックスとして紹介された。

そして、それらの時代に合った診療体制を整えた上で、治療の決断は患者に任せている。治療の主体は、あくまでも患者にあると考えているからだ。

「治療をしないとどうなるのかを分かりやすく説明しますが、決断は患者さんに任せます。歯を守るのは自分という意識を持っていただきたいからです」

父から歯科医院を受け継いだ徳永院長も、そろそろ次の世代への継承を考える年齢になってきた。以前は午前10時から午後9時まで診療し、1時間だった休憩時間を変更し、午前は10時から1時まで、午後は4時から9時までと休憩時間を長く取るようにしたのも、体をいたわりながら、できるだけ長く診療を続けるためだ。

「まだ歯科大学の学生ですが、長男が将来、一緒に診療したいということであれば、このビルの上の階に拡張することも考えています。インプラントができるオペ室を備えれば、患者さんによりよい治療ができますし。ただ、それはまだ先の話。今は来院してくださる患者さんを大切に、これまでと同じように、よりよい治療を提供していきたいと考えています」

徳永院長とスタッフのみなさん

PROFILE

徳永 哲也 先生

●1989年　大阪歯科大学卒業　●1990年　勤務医を経て、父が経営していた徳永歯科医院に勤務
●2003年　院長に就任

徳永歯科医院　住所:大阪府大阪市淀川区木川東3-4-31　TEL:06-6301-5195　HP:http://www.tokunagadental.jp/

SASAKI
SASAKI Care & Communication Vol.49 September 2019 お問い合わせ・ご意見:『C&C』事務局 細谷俊寛
FAX 0120-566-052　http://www.sasaki-kk.co.jp
発行:ササキ株式会社　東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F
●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。